

C-4



(人生は斯教に依て輝く)

聖せい二に者さんのし教や

(何人も一讀三省を要す)

— 所輯編會本教正京東 —

— 1908 —

258  
791



特47  
892



即ち  
ハリストス教の事





目 録

頁數

〔上〕 總論、— 基督教 即ち 聖三者の教。……………三

〔中〕 各論、— 聖三者の事。……………十

第一、上帝父の事(造物主)。……………十一

第二、上帝子の事(言 救世主)。……………十七

第三、上帝聖神の事(成聖者及び教會)。……………四十一

〔下〕 結論、— 聖なる 審判者と 各人の 賞罰。……………五十二

通俗正教 傳道短話 聖三者の教

〔上〕 總論、— 基督教 即ち 聖三者の教。

眞の上帝天に在り、父の宗教は我等 人々の間に種々な名稱を以て呼ばれます

が、我が國民は大抵 耶穌教若くは基督教と申します。其は我等の主耶穌基督

正しく言へば、ハリストス—が斯の教を立て、人々に眞の神を知らせ、御

身は罪なくして世界中の 人々の爲に身代りに立ておほせいの 靈魂を滅びから救

ふといふ 大業を成就して下さったからであります。故に斯の教を單に神の教

といふよりもハリストス教と申すのは最も明かに斯の教の 特別な所を顯はして

上

三



り其神といふ意味にはすいぶん大した相違がありますけれども世の人は只神といふだけのことを聞いて飛でもない間違ひを起します。其處に基督教即ちハリストス上帝の教と申せば間違ひありません。然るにも一つ斯の教を特に名づけて『聖三者の教』と申すことがあります。其はどういふわけかと申すに斯の名稱は最も著しくハリストス教の奥義眞理の眞理たる所世の悉くの宗教にも哲學にも立超て奥深き味ひのある所を顯はしてをるからであります。元來我等の主上帝は只獨一である只獨一であるから此上もない一番尊い上帝であるといふことは世の中の多くの偶像や異教の神々に高く優つて我がハリストス教の誇るべき所ですが、只これだけでは未だハリストス教の上帝が最も著しく異教の神々に立超えてありがたむといふことがよく分りません。其は異教の中にも上帝の惟一であるといふとだけは信じてをる者が多少あります。即ちイウデヤ教や、マホメット教にも、上帝の惟一だけは認めてをります。又自然神教とか何とかいふて「余

はハリストス教に就かなくとも、上帝の惟一だけは知てをる」といふ様な連中もあります。けれども至聖三者といふ眞理の奥義を有ち給ふ上帝は、只ハリストス教の眞の上帝ばかりです。三位一性の奥義だけはどうしても天の特別の啓示なるハリストス教に依らなければ分りません。即ち我らの奉ずる上帝は、常に本性が惟一であるばかりでなく、其個位に於て三つであるといふとは、ハリストス教の上帝が最も著しく異教の神々に立超て有難く尊い所以であります。そこで斯の教を特に『聖三者の教』と名づくるのは尙大に味ひのあることであります。斯く惟一の上帝に三つの個位があるといふことは、夙に舊約に於て上帝のお啓示があつた事でした。即ち聖預言者イサイヤは、上帝の啓示に於て光榮なる主の寶座を繞り歌ふセラヒム(といふ天使の最高等なる者)が『聖聖聖ナルカナ主ヨ』といふてをるのを見せられたことがあります(イサイヤ六の三)ここに惟一の主に向つて三回「聖々々なる」を呼だのは、上帝の個位が三つであることを示し、終りに「主」



といふ言を以て其本性は只一つであるといふことを示された者で、した。此は預言者の異象の中にでしたが、又特に形を以て即ち上帝は太祖アウラムに三人の旅人の姿で現れて斯の聖三者の奥義をお示しになつたこともありました(創世紀十八卷)。

尙其他にも舊約に於て、たくさん啓示はありましたが、至聖三者の名が父と子と聖神といふ其名稱まで示されて三位一性の最もはつきりとした啓示は、新約になつてからであります。其は舊約の時は大衆の靈魂がまた幼稚蒙昧を免れなせんでしたから、若も上帝が一般に其個位の三つあることをお示しになれば、忽ち大衆の民は、是を三つ別々の上帝の様に取るとんでもない迷ひを生ずるやうになる患ひがありました。故に慮り深き上帝は僅かに少數の聖人義人に其一端をお示しになつたばかりでした。けれども新約の時代になつては、だんく人々の靈魂も進歩して此の至聖なる奥義を明かに示すことができる時期となりました。だから、主イ、ス、ハリストスが世界に對する救ひの傳教においでになる發端

に、——主の洗禮の日、——至聖三者は著しい容子を以て世界に現はれました。即ち父は天より聲を以て、子は地に人の形を以て、聖神は空に鶴の形を以て現はれたことは、新約全書に詳かであります(マコ三の)主イ、ス、ハリストスは其御門徒らを世界の傳教に遣はすに際し、最も明かに此の三つの位の名を呼んで仰せ出されました、——「汝等ハ往テ悉クノ民ヲ教ヘ、彼等ニ父ト子ト聖神ノ名ニ依テ洗禮ヲ施セ(マコ三の十九)」と。此通り三つの個位の名を擧げて之を總括した「名」といふ言は單數です。之れは上帝には三つの個位があるけれども、此の三つは互ひに尊い卑しいの區別なく、只一列に同様に尊い上帝で其本性は只一つに歸する者であるといふことを認めるに確かなる上帝の直言であります。

神學者なる聖使徒イオアンは、又明かに上帝の三位一性を證明して「天ニ在テ證チナス者ハ三ツ、父ナリ言ナリ聖神ナリ、而シテ此ノ三ツ



「者ハ一ツナリ」と申してゐます（イオアン一書）茲に「言」といふのは、やはり上帝の子のことをさして申したのです（上帝子を言と評）。

斯く父と子と聖神の三つは、一つであるけれども、此の三つは各自主自由ある個位で有て、其が各々自主自由を有ちながら、本性の惟一に居て決して分れないといふのは、實に上帝の圓滿神妙なる所以で我らはとても自分に度つて分ることもできませんが、我等の靈魂は上帝の肖像ともいふべき者ですから試みに其靈魂について考へてみると、其中に三つの能力、一智と情と意旨がありま

す、此三つは一つの靈魂で決して三つ別々の靈魂ではありません、此心理から幾分か悟られます。

前申した通り父と子と聖神は決して此の中でどれが尊くてどれが卑しいといふ差別なく、共に同等同權の上帝であります。斯く申すと其では上帝の中にも互に衝突する様なことがありはせぬかと疑ふ人もありまじやう。なるほど互に尊いことも權力も同等で少しの優劣もない者が三個別々であるとすれば、時に或は衝突も免れないでしやう。けれども、此の事を善く考へねばなりません、父と子と聖神は決して三個別々の上帝ではない、只個位に於ては別でも其本性は全く一つの上帝であります、全く一体で決して分れない離るゝことのできない上帝であるといふことです。たとへば我らの耳と目は其司る所が違ふけれども、其尊いことは同等です。而して耳が二つと目が二つ共に一人の上に備はつてをるけれども、此の二つ若くは皆で四つが決して互に衝突するといふことは少しもありません。何人にも耳と目が喧嘩をしたといふ例もなく、目が耳と争ふたといふこともありません。其通り上帝父は決して其子と争ふといふことなく上帝聖神は又決して父と子に意見を異にするなどといふことはありません。却て上帝父は子を愛し、子は聖神を愛し、又聖神は父と子を愛し、此の三つは互に相愛して世界のない太始からいと福樂にをらるゝ者であり



ます。此通り上帝は愛であります、上帝の三位の關係は全く愛であります。聖書に上帝父の直言を以て其子——イ、ス、ハリストス——の事を「此ハ我ノ至愛ノ子、我が喜ベル者ナリ」と仰せられたことが三回あらはれてをります（マテ、三の）かの大に厚く上帝の啓示を受けた聖使徒パウロは衆信者に向つて「願クハ我等ノ主イ、ス、ハリストスノ恩寵、上帝父ノ仁愛、聖神ノ交親ミハ爾等衆ト偕ニ在ランユトナ」と云て此聖三者の間よりの愛を證明してをります（コリント後書十三の十三）

〔中〕各論——聖三者の事の。

其聖位に於ては三つであるけれども、本性に於ては惟一の上帝として其本質

は少しも違ふ者でないといふことは、前回におはなし申した通りですが、茲に又三つの個位各の性質は各々違ふてをるといふことを心得ておかねばなりません。即ち上帝父には父の一種特別の性質があり上帝子には子の一種特別があり、聖神には聖神の特別があると云ふことです。是の定理を正教會は左の如くに教へてをります。

「唯一つの上帝の性に父と子と聖神の三つの個位がある、而して父は永遠の世の前に其本体から子を生み、聖神を出した者である。子は永遠の世の前に父から生れ、父と一体である。聖神は永遠に父から出て父と子に一體である。」

〔第一〕上帝父の事。

其一、父の特別なる性格。

暗黒なる人生は斯教に依て輝く者となる、其は光明の父を上帝とするからです。



此通り上帝父は決して、何からも生れず、出でず誰からも存在を受けないで御自分が永遠の前に其獨一子を生み且つ聖神を出だす所の惟一の泉であります。即ち上帝父は一切聖なる個位の根本であるといふことが其特別の性質であります。聖書に此の事を明して、主イエス、ハリストスは『父が己ノ中ニ生命ヲ有ツガ如ク子ニモ己レノ中ニ生命ヲ有タシム』と仰せられてあります(イオアン福音)茲に『父が自分に生命をもつてをる』とは即ち何者からも生命を受けたのではないといふことが明かです。是れ父といふ名前の出た所以で、丁度此世の一家に於て父が一家子孫一切の原因で其一族を連ね合せてをる根本である様に上帝父は至聖なる個位の原因で且つ一切の個位を連ね合せてをる根本であるといふことを悟られましたやう。

其二、上帝父造物主。

前に申述べました通り、上帝父は永遠に聖位の本原ですが、彼は又世界と我ら人間と其他一切の者を造り萬物に存在の初を與へて下さったので之を造物主と名づけます、信經に此教理を明して、左の如く宣べてあります。

『我レ信ズ、一ツノ上帝父全能者、天ト地見ユルト見エザル萬物ヲ造リシ主ヲ』

此れは勿論聖書から出た定理で即ち舊約には『上帝ヤ爾ハ獨リ主ナリ、爾ハ天及ビ諸天ノ天ト天ノ衆軍ヲ造リ又地及ビ其中ノ萬物ト諸海及ビ其中ノ萬物ヲ造レリ、且ツ爾ハ悉ク之ヲ生存セシメ、天ノ衆軍ハ爾ヲ崇拜ス』とあり(ネイミヤ)、又新約には聖使徒パウルの言に『世界及ビ其中ノ萬有ヲ造リシ上帝ハ天地ノ主ニシテ手ニテ造ラレタル殿ニ居ラズ』と云てあります(使徒行十)又聖使徒は『凡ソノ家ハ之ヲ造ル者アリ、タ、萬有ヲ造リシ者ハ上帝』



ナリ』と云てをります(三)の四(一)のさやうどんな粗末な家でも之を造る者がなくてひとりではできません。されば無神論者は若もあの宏大なる東京中の富豪の家が何も無い武蔵野にひとりでにできた者であるといはぬかぎりは此のいと宏大なる世界が上帝無しにできたといふことはできません。彼らは一人の家を建てるのに其主人や大工の顔を見ておく者ではありません。けれども、之を建てた者があるといふことは決して疑ひませぬ。此の世界萬有を造り立てた所の上帝のあるといふことは右の家を建てた者があるといふよりもまだ確かな道理です。其で聖使徒は又次の如くに曰ふてをります「蓋シ上帝ノ見ル可ラザル事、即チ永遠ノ能力ト神性ハ創世以來造ラレタル物ヲ察スルニ由テ見ルベシ、故ニ彼等ハ推譲スベキナシ」と(ローマ)の家を造つた者があるから世界を造つた者もあるといふ様な論法は彼れ驕傲なる事者などは大に之を淺はかな様に思ひます。よし淺はかといへば其れでも宜しい

けれども其様な淺はかな比喻を用ひても分らぬほどに墮落した人間の智慧の昏昧はいかに憫むべきではありませんか。人間は何故に孝すべきやは論究するともいらぬ、其通り我らは何故に上帝に敬事すべきやといふことは本來智慧の明かな人の爲には一の喩言を用ふることもいらなかつたのです。  
 然るに無神論の或異教家はすいぶん奇怪な非難を持出します、即ち大工が家を造るのには木や竹や土とか石とかいろいろの材料がある、上帝が世界を造るのには何から造つたかと申した者がありました。此れは上帝を餘り小く考へてゐるのです。上帝は人でない、即ち上帝である、全能者であるといふことをよく考へて見るならば、こんな質問に付ては自ら己が愚を悟る様になつてきます。上帝は何からも材料を取りません、即ち何もない所から造つたのです。大工は木や土がなくては家が建てられん其れは人であるから仕方がない、けれども上帝は其木や土もお造りになつたのです、何もない所から世界萬物を造り給ふた



のです、それは全能の上帝であるからです。此の信仰は全世界何れの國民も生れながら持てをりました。故に人力で出来ないことを神に願ひます。先づ天に父ありといふ信仰があればこそ、此世の尊いお方のことをも天の子、或は神の子と唱へるではありませんか。何人も正直と謙遜を以ていと高き天に其心の目を向けると、衷心には覺えず「天ニ在ス我等ノ父ヨ」と唱へて、いと恵み深き上帝父を尋ぬる様になります。

嗚呼實に無を稱して有と爲し給ふた(ローマ四十七)所の上帝は讚美するに堪る言もありませぬ、實に此の高き天も廣き地も輝く月も多くの星も國も人も其他あらゆる場所も時も皆此の上帝から造られたのであります。即ち世界は時と共に上帝から造られたので、決して永遠から存在た者ではありません。即ち聖王預言者は上帝を讚歌ふて「山未ダ生ゼズ爾未ダ地ト全世界ヲ造ラザルノ先且ツ世ヨリ世マデモ爾ハ上帝ナリ」といふてをります

(詩篇八十九の三) 若も何人か善く精密に斯の天地萬有を觀察するならば其初め之を造つた全能者は如何に智慧の豊かなお方で有たかを想はれ又細密に悉くの生物の狀態を研究すれば其造物主は如何に大仁慈で有るかを認められます。故に聖詠者は又左の如く歌ふて造物主を讚揚して居ます。

「主ヤ爾ノ工業ハ何ゾ多キヤ、皆智慧ヲ以テ造レリ」(詩百三の)  
 「主ハ宏慈ニシテ矜恤寛忍ニシテ鴻恩ナリ。爾ノ手ヲ開キ恵ミヲ以テ悉クノ生ケル者ニ飽カセ給フ」(詩百四十四の)。  
 尙上帝父の大仁慈の最も著しく彰はれたのは罪人の救ひの爲に其獨生子をお降しになつたことです(イオアン一八)此れは次の章に詳かであります。

〔第二〕上帝子の事。

其一、子の特別なる性格。

暗黒なる人生は斯教に依て愈輝きます、其は輝くの主ハリストス上帝を有するから。



上帝子の特別な性質も聖書に詳かです。即ち之を『父ノ子』と云ひ、『獨生子』と云ひ、『上帝の(實子)』と云てあります(イオアン五の廿、三の十)茲に上帝の子を特に『獨生子』といふのは、上帝には子といふ者は全く此の獨りに限り、決して人間の様にたくさんの子がある者でないことを示した者です。又特に上帝の『實子』といふのは、決して世の人の養子といふ様な具合でなく、實に上帝父の本体から生れた眞實の子であることを示すのです。私ら信者のことを教會で『上帝の子』と申しますけれども、此れは決して上帝の本体から生れた意味ではない、我らは上帝から造られた物である。其れが上帝の子と名けられるのは、只其深き恵みをうける状態から象つた言です。けれども聖なる個位にいふ上帝の子の名稱は決して象りの言ではない、實に其眞實の子であるといふことは右に上帝の獨生子又實子と曰ふに依ても確かである、のみならず、聖書中にあらはれてをる所の主イ、ス、ハリストスの行ひに確かに上帝の行ひがあることに

依て一點の疑ひもありません。  
 或は上帝にはどうしてたつた獨一の子があるばかりで外にたくさんの子がないのかと怪しむ人があるかも知れませんが、此れは固り上帝の至聖至妙なる秘義に屬することです。我らが彼此探索すべき者でもないし、又其必要もありません。其よりも我らは上帝が我ら罪人を滅びから救ふために其かけがへのない獨生子をさへ惜まずしてお降しになつたことを思ふて其愛の限りなきを認め、且つ其測られぬ憐れみに向つて感謝することは大に必要であります。  
 茲にも一つ心得ておくべきは、上帝の子が父から生れたといへば、何れの時代にかまだ其生れない始めがあつたと思ふてはならぬことです。生れたとは云へ決して人間の父が前に在て子が後から生れたといふ様なわけではない。上帝の子が父から生れるといふのは、只假りの言で人間の父から子が生れるふしぎの容子から借りて稱へたのです。且つ其生れは永遠の先に於ての生れです。また



時代とか時間とかいふ者は一切ない人間が今想像することでもできない始めなき永遠の先に生れたのであれば、勿論上帝の子には生れたといふ始めはない。聖書に父が子を生んだことをいふて『我ハ今爾ヲ生メリ』と申してゐるのは(聖詠二)、永遠の今生んだといふことです。即ち上帝は空間の主であると共に時間の主であるから、時間の制裁を受けることがない。我らは一寸の場所をも借らずにはゐることができない様に、又一刻の時間をも免れるとはできません。今日の何時何分何秒といふのは、今ちょっと瞬く間だけのことで、直に過去てしまふ。けれども上帝は永遠の主である上帝には過去現在未來の別なく、悉く今である。此様な上帝父から永遠に生れた主であれば父が始めなき上帝である通り子も始めなき上帝であるといふことは勿論です。此の世界も何もできない前に上帝父が子を生んだといふことを、層明かに聖詠に歌ふて『我(父)ハ黎明ノ先ニ爾(子)ヲ生メリ』といふてあります(聖詠百九)『黎明』とは一日の中で一ば

ん早い時刻ですから其から言を借りて世界の太始萬世の前に上帝父は其子を生んだ、即ち上帝の子は絶対的早く永遠に存在し給ふことを知らせた者です。而して上帝の子は父から生れても決して人間の親子の様に別れて二體となるのではなくて、やはり一體であるといふことを聖福音經に象つて上帝の子を『父ノ懷ニ在ル者』と名けてあります(イオアン二)若も上帝が有形の者であつたならばこんなことはできません。けれども上帝は無形です、全く神靈である、故に上帝の子が父から生れても全く離れずといふ眞理は誠にあるべきことと信ぜられます。たとへば我らの言に現はれる思想は心から生ずる、乃ち思想は心から生れて別々に二体の者となるかといへば決してさうではない、心と思想とつまり一つです、決して人の中に此の二つが別れてしまふといふことはありません。又形の上でも極精微な光のことについて考へて見れば、聊か分ります。即ち太陽から光が生ずるけれども、日と光と決して分れてしまふのではない。



は日として光は光として各々其特質を保ちつゝ一體である。上帝父から子が生れたといふ奥義は此様な例に依て僅かに其萬分の一にも足らぬ道理を推測するばかりです。無論上帝からの特示(聖書)と教會の教(が)有ればこそ此れだけのことも分るのです。尙上帝の子について以上申述べた教理は「信經」の第一條に左の如く宣べてあります。

『又信ズ惟一ノ主イ、ス、ハリストス 上帝ノ獨生ノ子、萬世ノ先ニ父ヨリ生レ、光ヨリノ光、眞ノ上帝ヨリノ眞ノ上帝生レシ者ニテ、造ラレシニ非ズ、父ト一体ニシテ萬物彼ニ造ラレ。』

其二、上帝の子が言と名づけらるゝ事。

上帝の子イ、ス、ハリストスは又上帝言と名づけられます。即ち最前總論の部

に引きました聖書の教に「父ナリ、言ナリ、聖神ナリ……」といふことがありますが、神學者聖イオアンは、此言といふ名稱についてハリストス上帝の子の上帝の性を明す爲に其聖福音の首に左の如く書いてをります。

「太初ニ言有リ、言ハ 上帝ト共ニ有リ、言ハ 即チ 上帝ナリ。  
ニ是ノ言ハ 太初ニ 上帝ト 共ニ 有リ。三萬物ハ 彼ニ 由リテ 造ラレタリ、凡ソ 造ラレタル 者ニ、一モ 彼ニ 由ラズシテ 造ラレシハ、無シ」(イオアン一)。

是から極概略此言について講話を致しませう。

「太初ニ言有リ、言ハ 上帝ト 共ニ 有リ、言ハ 即チ 上帝ナリ。」

此は聖イオアンの福音の有名な大文字です。茲に「太初」とは固より此の世の人も國も、天地も、世界も、何も無かつた前のこととす。世間で人人が平生いふ所の初は、皆眞實の始めではない、皆始の前にまだ始があります。たとへば此の書物



は、初めの一枚が始めであると思ふ、けれども其よりも先に之を作った人が始  
 です。其人よりも其親の方がまだ始です。けれども親には又其上に親がある、  
 種にはまだ其先に種がある。そこで平生我らがいふ始といふことは、只或者  
 と此者と比べて途中からの後先を見て假りにいふばかりです。其實は今始と  
 いふてをることが其前の者から見れば、終りなのです。が、此の世界は、決して  
 何時までも始から、始と溯つて果しのない者ではありません。必ず其果しがあり  
 ます、即ち世界の初めといふ時がありました。そこで今此の聖福音にいふ「太初」  
 とは此の世界のまだ出来なかつた太初のことです。舊約全書の開卷第一に「太  
 初ノ時上帝ガ天地ヲ造リ給フ」ことをいふてある、其太初と茲にい  
 ふ「太初」とは同じいみであります。  
 此様な太古の太初に於て、「上帝言」は既に有つた。即ち主イ、ス、ハリスト  
 スは、御身が天の父と共に有ち給ふ所の光榮のことをさして『創世ノ先ニ

我が爾(父)ニ在リテ有テタル光榮」と申されたことがあります(イオアン、  
 此の様に言即ち主イ、ス、ハリストスは、世のない先から有た者であれば、又  
 時のない先から有たといふことも勿論です。なせなれば世の太初は即ち時の太  
 初で上帝造物主は世界と共に時間をもお造りになつたのです。そこで世界の  
 じめ時間のない先に有た者には、始のがなく、始ののない者には終りもない、  
 取りも直さず上帝言は永遠の者です、此世の時間に支配されることのない「永遠  
 の「生命」です(イオアン一公一の一、二)。(この世界中でどの様なえらい者でも、生れた  
 始めと死ぬる終りをもたない者はない。獨り主イ、ス、ハリストスは此様な  
 時間と年代の上に立て永遠無窮の主です。聖使徒神學者の黙示録に所謂「今  
 在リ、先ニ在リシ、後ニ在ラントスル者」即ち何時も其儘にして在し給  
 ふのです(黙示一)是れイ、ス、ハリストスが形は人の子にして、實に上帝の子たる  
 所以です。上帝の子は人人の救ひの爲に人の形を成すことが必要でした、故に



天より降ッて聖神の妙用に由り至聖童女から肉体を取て人となられました。即ち信經第三條に「(主ハ)我等 人々ノ爲 又我等ノ救ヒノ爲ニ 天ヨリ 降り 聖神 及ヒ 童貞女 マリヤヨリ 身ヲ 取り 人ト 成リ」とある、此少し後(イオアン一)に「言ハ 肉体ト 成テ 我等ノ 間ニ 居レリ」とある通りです。けれども此のいと大なる贖罪の事業を成すのには、必ず上帝の性がなくてはなりません。又上帝の子の上帝の性は決して其人の性と離れる者ではありません。即ちハリストス 救世主は、只の人ではない、真正に上帝です。此の事を神學者聖イオアンは前に「言ハ 即ち上帝なり」と明したのでです。其時世の迷へる異端者らはハリストスの上帝の性について種々間違た妄言を作してゐましたから、殊に斯真理の宣言は必要で ありました。

此通り言は即ち上帝である、イノス、ハリストスであるといふことは、もはや明かです。其で今度は茲に 聖使徒 神學者イオアンは何故にイノス、ハリストスのことを「言」と名けたかを申述べましよう。そもイノス、ハリストスが常に主と呼ばれ、上帝の子と唱へられ、救世主と名けられることの外に、尙「言」と名けられるのは、いと味ひある名稱です。抑此の名稱は 聖使徒 神學者が主上帝から啓示を受けた異象の中に「彼(イノス、ハリストス)ハ着ルニ血ニ染ミタル 衣ヲ 以テシ、彼ノ名ハ 上帝ノ言ト 稱ヘラル」とある所(黙示録十九)に基き、又主イノス、ハリストスの直言に「凡ソ 我が父ヨリ 聞キシ 所ヲ 汝等ニ 告ゲシ」とあるに(イオアン福音 十五の十五) 應じて、智慧ある 受造物 即ち人類に 對して 睿智なる 上帝の子が 上帝の ことを 彰はし教へる者であるといふことを示す所の名稱です。丁度我ら人間の言は 其心の有様を 言顯はす者で 言に依らねば 其人の衷心の ことは 分りません。其通り 天の父なる 上帝の ことは、イノス、ハリストスに 依て 甫めて 明かに 顯はされました。總て人は 上帝の子に 依らずには 上帝の ことは 何も 分りません。此れ昔から 上帝を 離れた 人人が、真



正の上帝を忘れ、上帝のことをとんでもないことに思達へて迷ひに陥つた所以です。然るに時至り、上帝の子イ、ス、ハリストスがお降生になつて、甫めて上帝のこと、其聖旨のこと、彼が我ら人間に對する關係のことなど（各人の信仰次第で）大にはツきりとなりました。是れ上帝の子が「言」と名けられた理由の一で

す。  
次に此の名稱は、上帝の子が其父に對する位格の關係を悟らせます。彼は父に造られたのでないといふことは勿論、又人間の子が其親から生れる様な具合でなく、即ち情慾もなく、苦痛もなく、損じもなく、親子二体に分れるのでもなく混合るのでもなく、一種何ともいふことのできない且想像することもできない奥義を以て上帝父から生れたので、あります。丁度人間の言は心から生れる者である、けれども心は情慾から言を生まず、産の様な苦痛もなく、損じ耗ることもなく、只心に思へば即ち言となつて生れるのです。固り限りなき神妙の

上帝の父と子の關係のことを人間の智慧で此だけの事で説明することはできません。けれども聖なる教師は、でくるだけ我らに奥義のことをも悟らせたいと思ふて我らに在る言のことを以て、いと尊い上帝のことを教へられました。是れ上帝の子が言と名けられた理由の二です。

又我らは、普通の人間である限りは心あれば必ず言がある。其通り上帝は父在れば必ず子も共に在る、決して父が只獨り先に有て子が或る時間の後に生れたのではない。即ち上帝の子は永遠の先に父から生れ給ふたので父と共に永遠の者であるといふことを此の「言」に依て幾分か悟られます。是れイ、ス、ハリストスを上帝言と名けられた理由の三です。

終に我らは、一場の説教をなすにも心と言と兩方を使ひます。即ち之を心に考へて、口に言ふ。若し言だけで心がなかつたならば、説教も何もできない。又心だけで言がなくては何の役にも立ちません。そこで一の説教は心と言と



共にして作るのです。先づ其様な道理で此の世界は上帝父と子と共にしてお造りになつたのです。即ち此の聖福音にいふ言といふ名稱は、上帝の子が世界に對して造物主であるといふ關係を悟らせます。此れはハリストス救世主が上帝言と名けられた理由の四であります。

『是ノ言ハ太初ニ上帝ト共ニ有リ。』

上帝言は、自ら上帝である、而して上帝と共に有るのは、即ち彼が上帝父に於る真理の關係を明示す者です。上帝子は、父と同一の上帝で、何時も別れず、又混雜にならず、子は全く子たる特別の位格を以て父と共に有り給ふのです。抑上帝の父と子の奧義については、我ら人間の智慧では、果して如何いふ具合であるか善く分りません、けれども上帝の啓示は、少しでも人間に永遠の生命にかゝはる真理を悟らせたいと思召て、父と子の名稱を以て其生れるといふ關係の一分を示され、又言の名稱を以て其生れについては少しも肉體にある様な

わけでないといふことを示されました。茲に『言が太初に上帝と共においでになつた』といふことは、もはや前節に述べられたことですけれども、聖福音者が今又茲に同じことを復語したのは、此の定理に至りて大切であるから、殊に其頃いろくな異端が起つて上帝言についての定理を變壞る様な迷ひの學説があつたから、正統なる信者の心に深く此の定理を銘記して決して彼の偽りの教の迷ひに陥らない様に注意を加へたのです。あゝ上帝言は、永遠の太初に一萬世の前に一上帝父と共に有た。』されば上帝父の永遠なるが如く上帝言も亦永遠であります。前にも申した如く決して一瞬間も上帝の子の存在はなかつたといふ時間はない、即ち彼は無始無終の上帝であるといふことを認むべきであります。

『三萬物ハ彼ニ由リテ造ラレタリ、凡ソ造ラレタ者ニ一モ彼ニ由ラズシテ造ラレシハ無シ。』



唯一の上帝の外何でも一切萬物は皆造られた始があります、即ち彼(上帝言)に由て造られたのであります。聖使徒パウルの説明してをる通り「蓋シ萬物ハ彼(上帝子言)ニ由テ造ラレタリ。—天ニ在ル者地ニ在ル者見ルベキ者見ル可ラザル者或ハ寶座或ハ主制或ハ首領或ハ權柄、一切彼テ以テ且ツ彼レノ爲ニ造ラレタリ」(の十六)。

故に我らは上帝父を造物主と認めると共に、又上帝の子イ、ス、ハリストスを造物主と認めねばなりません。但し茲に「萬物は父に造られ又子にも造られた」と聞いて、或は二個の造物主が別々に仕事をしたのかと思ふ方があるか知れませんが、此れは先に申した父と子は何時も相共にして別れない一体の者であるといふことを考へて見るならば、分りまじやう。又決して此世の大工が器械を以て物を造る様に上帝父は子を器械に使ふて世界をお造りになツたのではありません。二者共に同尊同貴の上帝で、あれば、どうして其様なことがありまじやう。

う。實に此の二者は親しく相共にして萬物をお造りになツたのです。斯く二者と親しく一所に居るのですから、勿論其間に衝突するなどのことはありません。ハリストス救世主の親教に依るに「子の行ひは又共に子の行ひで、父の聖旨の外に子が別に自分だけのことをなす者でない」といふことは明かです。「父ノ行フ所ハ子モ亦同ジク之ヲ行フ。蓋シ父ハ子ヲ愛シテ凡ソ己レノ行フ所ヲ彼ニ示ス」(の十九、二十) 最初に申した比喩我らの説教を只心だけの作用といふこともできず、又言だけの作用といふこともできない様な者です。而して茲に聖福音者が特に「萬物が上帝言に由て造られた」とを申されたのは、上帝父は自ら我らが決して見ることもできず、近くこのできない光に居て恒に喜んで子を以て現れ、且つ子に由て行ひ給ふからであります(の二十三)。

も一つ念の爲に申しておかねばならぬのは、上帝聖神のとです。茲に「萬物は皆造られた」といふてあるのは、只天使以下の凡ての者で、聖神は決して



此の中に含んではをりません。故に聖福音者は、右の下半句に「凡そ受造物は上帝言に由らずして造られた者はない」といふて重ねて造物の大能力を宣明すと共に、單に萬物と曰はず、即ち「造られた者」といふて此の意味を示してをります。凡そ「造られた者」は一切上帝言の造り給ふた者にちがひはない。けれども聖神は決して「受造物」でない、上帝の子が造られた者でない通り聖神も同じく上帝であります。尙聖神のとは後に詳かであります。

聖福音者は尙續いて「上帝言は自ら生命を有ちて悉くの人間の生命の泉であり、且つ靈魂の光である」とをいふて「彼ノ中ニ生命アリ、生命ハ人ノ光ナリ」と申してをります(イオアン)。又上帝言が我ら人間の救ひの爲に世に降て人体を取り給ふたと其光榮のいと尊い状態を謂て「言ハ肉體ト成テ、我ラノ中ニ居レリ、恩寵ト眞理ニ滿テラレタリ。我等ハ彼レノ光榮ヲ見タリ父ノ獨生子ノ如キ光榮ナリ」と申ました(イオアン)。

其二、上帝の子救世主と全人類の救贖。

以上は大主イ、ス、ハリストスが上帝の獨生子で自ら永遠の主造物主であるといふ教話でしたが、今度は上帝子が救世主として我等罪人を救ひ助けて下さつたことを申しませう。其については、も一度信經の第三を讀上げませう。「我ら人人の爲め、又我らの救ひの爲に天より降り、聖神及び童貞女マリヤより身をとり人と成り。」抑我等人間の救ひの爲にいと尊き上帝の子が特に世にお降りになつたのは救ひの事業は世界を創造のと同然の大事業で、全能なる上帝の外、とても如何なる高等の天使長でも他の如何なる受造物でも出来ないからであります。

上帝の子も上帝としては在らざる所なき者であります。けれども、其が救ひの爲に天よりお降りになつたと申すのは、前にも天地に在たけれども地に於ては形



を以て見ることはできなかつたのに、今度は人の身體を取て目に見える形で地上に現はれ給ふたからであります(イオアン三の)斯く人の救ひの爲には、上帝の子自らも人の身體を藉らなくてはなりません。上帝子救世主の至聖なる降誕は今を去ると、大約一千九百有餘年前、イウデヤのワフレエムといふ小都會で、ありました。彼の降誕は固り全世界の救ひの爲で、其救ひは凡そ彼を信じて頼む者を罪と罰と減びから贖ひ助ける爲でありました。

彼上帝の子は古から今まで尙今から後までの悉くの人間の爲に罪の贖ひをなすのであれば、自分は無論罪があつてはなりません、けれども若し通常にアダムの子孫であれば、どうしても原罪の遺傳を免れません。そこで彼は通常の法ではなく、即ち別段な法を以て聖神の作用に因て夫のない童女至聖至淨なるマリヤから身體を取りて人となられました(ルカ一の廿七、廿四、廿五)。茲に上帝の子が人體を取つたのは、實際に「人となつた」ので、靈魂と身體を備へてゐることは、全く普通の

人の通りで、只其違ふのは、少しも罪汚れといふ者がなかつたことであります。そこで主イノス、ハリストスは完全な人で又完全な上帝でありました、彼れの一個位には確かに上帝と人の二つの性がいと親密に合はされてありました、斯くてこそ彼は上帝と人の中保に立て、人を上帝に和睦させることができましたのであります。

『蓋シ上帝ハ一ナリ、上帝ト人ノ間ニハ仲保者モ亦一ナリ、乃チ人、ハリストスイ、衆人ノ贖ヒノ爲ニ己レヲ與ヘシ者ナリ』(テモスイ前二の五、六)。

而してハリストス救世主は實に如何いふ行ひを以て斯の萬世の救ひてふ一大事業を成就なされたかと云ふに、其は信經の第四條に左の如く宣へ明してあります。

「我ラノ爲ニポンテイピラトノ時十字架ニ釘タレ苦ミナ



受ケ、葬ラレ、』

上帝と人なるハリストス 救世主は、おほせいの人々の救ひの爲に、 大約三十三  
 年餘り地上に在て、其最後の三年間 預言者若くは教師として、人人に 上帝のこと  
 を教へ 罪人に悔改を勧め、たくさんな善行と奇蹟を行はれましたが、終に 司祭長  
 として、御身を 上帝の羔として 十字架を 祭臺として 大なる贖ひの祭りをさしげ  
 られました。頃は イウデヤが 既に 獨立を失ふてローマの 羈轡を受けてをる時で  
 した、即ち 異邦人なる ポンタイピラトといふ 太守が イウデヤの 政治をなしてゐる  
 時、主 イ、ス、ハリストスは、其 反對派なる 偽教師と 惡黨の爲に 誣告を受けて、  
 自らは 一點の罪なきりばな 御身を以てむざんにも 死刑に定められ、イエルサリム  
 の 城外なる ゴルゴスといふ 丘の上で 十字架にお懸りになり、散々の 苦しみを受  
 けて殺され、葬られました。此様に 上帝の子は 罪なくして 萬人の爲に 生命をお棄  
 てになつたのです。彼自ら豫て 此事を仰せられてゐました『蓋シ 人ノ子ノ

來リシハ、人ヲ 役ハシ 爲ニ 非ズ 乃チ 人ニ 役ハレ、且ツ 己レノ 生  
 命ヲ 與ヘテ、衆ノ 者ノ 贖ヒヲ 爲サン 爲ナリ』(マテ五、廿八)。

或は 上帝は 全能者で あれば、殊更に 自分の 獨生子を 十字架に 懸けずとも 外に 人  
 間を 救ふ 方法が あつただらうと 申す 方も ありまじやう。勿論 上帝には 幾らでも  
 方法 は ありまじやう、けれども 救世主 十字架の 法は 其 最も 善い 方法で あつた者  
 と 信せられます。そも 上帝には 義と 愛といふ 二つの 最も 大切な 本性が あります  
 が、義の 法から 云へば、罪ある 者は どうでも 罰せなければ なりません、乃ち 人は  
 自由にして 罪を 犯したので あるから、今世の 死の外に 永遠の 滅びに 陥らなけれ  
 ば なりません。けれども 上帝の 愛は いくら 罪ある 者でも 只之を 苦みに 任せて 放  
 て おくとも 出来ません、乃ち どうにかして 罪人を 滅びより 救はなくては なら  
 ぬ。併し 理由なく 之を 赦すのは 其 義に 合ひません。それかと 云て 人は 自ら 其 限  
 りなき 罪の 償ひを 立てることが 出来ません。そこで 上帝は 其 獨生子を お降しに



なつて罪ある萬民の爲に身代りとして悉くの罪に對する苦しみと死を受けさせ、それで上帝の限りなき義は満足されました。而して此様な上帝に叛いた罪人をも見棄てず之を悔改に導いて其獨生子をお降しになり救ひの道を立て、下さつたことで上帝の限りなき愛は彰はれました。聖福音に所謂「蓋シ上帝ハ世ヲ愛シテ、其獨生子ノ子ヲ賜フニ至レリ、凡ソ彼ヲ信ズル者ハ亡ブル」ナク乃チ永遠ノ生命ヲ得ン爲ナリ」(イオアン三)の此通り義なる上帝は愛の爲に其可愛い獨生子を死に御交附に成たのです、而して上帝の子も自ら萬民に愛の爲に斯の限りなき苦しみと辱めを御受けに爲たのです。故に其結果は之を信する人間の爲には永遠の生命となり、之を成し行ふた上帝の子自らの爲には亦限りなき光榮となりました。乃ちハリストス上帝の子は死後三日目に死より復活して、自ら生命の王たる光榮を顯はし、人々の爲に復活の基を成し、其から四十日目に天に昇り父の右に坐して自ら主たり王たる

光榮を顯はし、人々の爲に天國の門を開き、五十日目(昇天から十日目)に其父より撫恤者聖神を降して門徒等を固め上帝の道の爲に侃々として働く者となり、凡その信者等を固めて、罪より免れ成聖せられて上帝の國に進むことの出来る道を成全して下さいました。此の聖神の事は是から次にお話し申しませう

### 〔第三〕上帝聖神の事。

#### 其一、彼神の特別なる性格。

人生が暗黒より輝く者となるのは、上帝成聖者に依て愈々全うせられます。我等は上帝の子救世主が預言者として人々を教へ、司祭長として罪の贖ひを成し、王として信者の爲に復活と生命の途を開いて下さつたことは、既に大略申述べました。今度は上帝聖神が人々の爲に成聖者として働き給ふことをお話し申しませう。成聖とは我らがハリストスの救ひに與かる爲に聖神に依て罪より淨



くせられ善行に務むることです。此聖神の事は信經第八條に左の如く宜べてあります。

『又信ズ、聖神主生命ヲ施ス者父ヨリ出デ父及ビ子ト共ニ拜マレ、讚メラレ、預言者ヲ以テ曾テ言ヒシナ』。

茲に聖神を『主』と呼ぶのは、尙イ、ス、ハリストスを主と呼ぶのと同じ意味で即ち上帝の尊稱です。斯く聖神が上帝であるといふことは、聖書に基づく眞理で五旬節に聖神を愛けた所の聖使徒ペトルは、アナニヤといふ者の心得違を責めた時に自ら明かに聖神を上帝と呼んで證明してをります(使徒行實五の三四に詳)。又聖使徒パエルも、左の言を以て此の定理を示してをります。

『恩賜ハ殊ナルアリ、然レ凡 神ハ同一ナリ、職務モ殊ナルアリ、然レ凡 主ハ同一ナリ、行爲モ殊ナルアリ、然レ凡 ソノ事ヲ凡ソノ人ノ中ニ行フ上帝ハ同一ナリ』(コリント前書十の四五、六)

尙茲に聖神が上帝であるといふのは、決して父と子の外に別の上帝といふわけではなく、即ち三位一性の主であるといふ奥義です。されば、右の『信經』にいふてある通り『父及ビ子ト共ニ拜マレ 讚ラル』といふことは固り至當の眞理です。故に聖書に主イ、ス、ハリストスのお言には『父ト子ト聖神ノ名ニ因テ』と並べて擧られ(マコイサの八九)、又前に掲げた聖使徒の言には『聖神』を一番先に擧げて示されたことなど、すべていづれも優劣のない三位ともに同尊同貴の主であるといふことを悟られましたやう。

上帝聖神の特別な性格も聖書に依て確かです。ハリストス救世主は此世に於て、其門徒らとお別れになる時期が近づいた時に門徒らの心を慰むる爲め、又之を固むる爲に『撫恤者』と名づくる眞理の聖神を父から遣はすことを約束されました(イオアン十の五の廿六)。其お言の中に『眞理ノ神ハ父ヨリ出ル』といふことを最も明かに仰せられてあります。茲に決して『聖神は父より出んとする』とい



ふ様な 未來の言でなく、確かに『父より出る』といふ現在の言をお用ひになつたのは、即ち其實に『永遠に出る』ことをさして仰せられたのです。丁度主イ、ス、ハリストスは御自分の存在の永遠を示すために『アウラアムガ未ダ有ラザル 先ニ我ハ有ルナリ』と仰せられ(イオアン八)即ち『有る』といふ現在の言をお用ひになつた、其通り上帝聖神のことに ついても『出る』といふ現在の言を以て其永遠に父より出るといふ意味をお明しになりました。

此通り聖神は『出る』といふ状態を以て、父とも子とも異なつて一種特別であります。併しこゝに『出る』と『生れる』とはどの様に區別があるか。先づ『生れる』と云へば、親から子が生れるといふ状態をさす言『出る』と云へば、生命ある者から生氣が發る状態をさす言です。故に聖神の『神』といふ原語は『生氣』といふ意味であります。されば是れを聖氣と譯した流義もありません。けれども我が教會では多年の呼馴で『神』といふ文字を用ひてをる。此『神』といふ字を東洋で

は、『上帝』と『靈』の兩意に用ふから誠に困難です。其は兎に角上帝の個位の『生れる』と『出る』との區別は、實際の所は、とても限りある人智によくは分りませ

ん。  
 聖神についても心得ておかねばなりません。彼は父から出る者であるけれども其出るといふのは前に辨じた上帝の子が生れる場合に於けるが如く、永遠にして始めなき事である、一故に曾て父から聖神が出なかつたといふ時代はない、彼は確かに永遠に父から出る所の至聖なる個位である。又其出るのは、獨り父から出るだけで、決して子からも出るといふことはない、至聖なる個位の泉は實に一つである、斷じて聖神に限り二つの泉を有つといふことはない。もし聖神が父からばかりでなく、子からも出るとすれば、子も亦父からばかりでなく、聖神から生れる者とならねばならぬ。けれども斷じてそんな道理はありません。又聖神が父から出で尙父と子と共に一体であるわけは、先に上帝の子の特質



を明した場合に、辨明したのと同じ道理で、丁度人が生きてをれば必ず言と共に生氣が出るけれども、此の生氣を決して其生命と言から分けてしまふことはできない、又太陽には必ず光と共に熱がある、此の熱を断じて太陽からも光からも離してしまふことができない様な者であります。聖書中時として『子の神』といふことがあるけれども、此れは『上帝の子ハリストスに依て父から遣さるゝ、聖神』といふ意味で、決して是れが父と子から出るといふわけではありません。故に全地公會(第三の)の規則には嚴に此の『信經』を守ることを命じて、別に異様の信經を作ることを禁じてあります。

其二、生命を施す者及び啓示を施すの教師。

上帝聖神を『生命ヲ施ス者』と名けるのは、彼は殊に生命の力を以て萬物に與へ、最も人間に靈魂の生命を與へ給ふ故であります。舊約には上帝が世界を造り給ふ太初に上帝の聖神が水の面に覆ひ臨んだことを録され(創一の二)、新約には最もはツきりと主イ、ス、ハリストスが『人ハ水ト神ニ由テ生レザレバ上帝ノ國ニ入ルヲ得ズ』と仰せられてあります(三の五、イオアン)。

生命を施すの聖神は、又啓示を施すの教師です。此の事を右の信經第八條のをはりに『預言者ヲ以テ曾テ言ヒシ』と録されてあります。即ち舊約の時代には諸預言者に主上帝の聖旨を啓示して舊約の聖書を成立たせ、又新約の時代には聖使徒らに教を明して新約全書を成立たせました。之を以て我がハリストス教會で用ふる聖書は皆上帝聖神の啓示に因てできたのであるといふことを信すべきです。特に此の條に只『預言者』とありて『聖使徒』の事をいふてないのは此の信經を編述した時分に偽の教師ともが只舊約の預言については聖神の啓示でないなどと迷ひの説をなしたことがありましたけれども、聖使徒らが聖神を受け、て聖書を書いたとは、誰も疑ふ者がなかつたからです。而して聖使徒の明言し



た通り『預言は決して人意から出た者でない、乃ち上帝の聖人が聖神に感じて言ふた者』であれば(ペートル後書)、新約の預言も教も亦聖神に感じて録されたとは勿論疑ひのない道理です。

其他 聖使徒の相續者なる 聖師父らの教訓と 全地公會の議定なども亦皆至善なる聖神の導きを受けて誤りなく固められた者であるといふとも宜しく認むべき真理です。聖使徒は其初の公會に於て『聖神と我らと共にして決定た』といふとを斷言してをります(使徒行傳十五)。

### 其二、聖神の恩寵。

聖神が最も豊かに灌いだのは、初代の聖使徒と其他の大聖人らの上について著しくありました。けれども其後今でも彼は、真正の敬虔な信者の靈魂に通ふてのます。其は如何して得られるかと申すに、乃ち我らは熱心の祈禱と信仰に因て

聖なる機密を領けることに依て、其至善なる賜と恩寵に與かることが出来ます。『爾等豈知ラズヤ、爾等ハ上帝ノ殿ニシテ上帝ノ神爾等ノ中ニ居ルコナ』(コリンフ前書)。

『爾等 惡キ者ナルニ 尙善キ賜ヲ 其子ニ 與フルヲ 知ル、況ヤ 天ニ 在ス父ハ、之ヲ 求ムル者ニ 聖神ヲ 與ヘザランヤ』(ルカ十二)。  
所謂 聖神の恩寵の重なる者は七つあります(一)『一は』(明智といふて、淨き心と善き行ひを知て務める恩寵です。即ち斯世のなまぬきな肉體上の智慧でなく、上から來る恩寵的の智慧です(コリンフ後三の十七)。(二)『二は』(聰慧として上帝の聖旨と教の奧義を悟る恩寵です。即ち斯世の無知に反對する明悟です(廿四の四十五、ガラ)。(三)『三は』(善謀として殊に靈魂の救ひに關はる恩寵です。俗世界の姦計の様でなく、専ら真理に合ふ分別です(行實廿の廿七)。(四)『四は』(勇毅として、我が主に於る信仰を守り、世俗と肉慾と惡魔の誘に敵する所の恩寵です。即ち浮世を怖



れる卑法に反対する元氣を曰ひます(コリント前書十六の五)。「五は」超識とて教のことに  
 ついて衆民に立越た知識の恩寵です。即ち世の頑冥にして上帝を知らぬ者に正  
 反対で、牧者教師らに必要の恩賜です(イェレミヤ三の十五)。「六は」敬虔とて衷心から  
 戒慎て上帝を讃め、祈禱と聖務に善く務める様になる恩寵です。此の反対は即  
 ち不敬虔で彼の口頭ばかりで熱心らしいをいひ陰で不敬虔を働らく偽善者や、  
 正教會の森嚴な祈禱を冷笑する様な連中です(テモス一前書四の八)終に「七は」愛畏とて  
 上帝全能者の威光大權を畏れるけれども、決して監獄の囚人が看守や押丁を畏れ  
 る様な流義でなく、孝行な子が親を畏れる様な心です。即ち愛しての畏れで  
 殊に上帝の莊嚴な光榮と公義の前に恭敬して其義に合ふ者となることを務め  
 る所の性行です。彼の犯罪人が獄吏を畏れる様なものは、其中に少しの愛もない。  
 此様な畏れは、上帝の旨に合はぬとは勿論です。故に聖書に「愛ニハ畏レナ  
 シ」といふてあります(イオアン一書)然ども赤心を以て貴む意味の畏れは、聖書の

勤むる所です。『凡ソ主ノ聖人ヤ主ヲ畏レヨ、蓋シ彼ヲ畏ル、  
 者ハ乏シキナシ』と録されてあります(聖路加三の十、全廿一の廿四)。  
 此の外聖神の九つの結果として、親愛、悦樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠實、溫柔と博節  
 など、皆是れ至善なる聖神の佑けに因てできる所の結果であります(ガラテヤ書五)。

其四、教會と聖機密。

萬善の主なる主帝は我ら人々の成聖の爲に教會といふ者を立て、之を守る  
 に聖神の覆ひを以てし、凡て豊かなる彼の恩寵は悉く之を教會の中に藏めら  
 れてあります。而して特に信仰と悔改を以て望む人々の爲に、之を成聖するの  
 法として七件の機密といふ者が定められてあります。其第一は洗禮で次が傳書  
 膏其から聖體の機密です。先づ上帝を信じて救ひの教會に就く人が最初に受け  
 る機密は洗禮です。洗禮とは罪を赦されて上帝の前に淨き人となる恩寵の機密



です。其から傳聖膏は靈魂に生活力を附けらる、聖神の恩寵。聖體は信者が此上もない一番尊い恩賜を受けてハリストス上帝と體合し、罪の赦しと永遠の生命を得らる、最も有難い機密です。其から痛解機密といふ者が有て、我らが洗滌後の罪を赦され、聖傅油機密といふのが有て、我らが或病氣の時罪の赦しと借に身體の病氣をも痊される恩寵の法が備はつてゐます。以上五つに其他神品と婚配といふ二つを加へて都合七つの機密ですが、其巨細は別に専門の小冊子もあります、尙教會の教師についておしらへなさい。

〔下〕結論——聖なる審判者と各人の賞罰

聖なる父より遣はさる、上帝聖神は人々の成聖者として凡そ之を信する者にハリストス救世主の功德を得させ且つ成聖の恩寵を得させる者であるとは、既に前に申し述べました通りですが、此事は我ら人間の方から信仰と善行を以てお

願ひ申すのでなければ、上帝は強て之を降さる者ではありません。其で上帝は我ら罪人に早く罪から悔改して信仰と善行をなす爲に、此世で相當の期限を與へられてあります。乃ち罪人に悔改の猶豫を與へて之を救ひに招く所の上帝救世主は、決して何時までも其儘に棄置くとは致されません。相當に長い猶豫の期限も切れて上帝の定め給ふた時になれば、彼は人人の悔いたか悔いたかを調べ信仰が有たか無いか行ひはどうあつたかといふとを一一御覽になつて、其らに相當の裁判を下されます。此の裁判には二通りあつて一つを私審判といひ、一つを公審判と申します。私審判とは人が一人死ぬると只其一人の靈魂について行はる、裁判で、人の身の終りに在ります。公審判とは全世界の悉くの人類の靈魂と身體を合せて一時に行はる、裁判で此の世界の終りに在ります。(私審判のことは、ルカ十二の廿、公審判のことは、マテ二十五章其他にも詳。)公義なる上帝の審判のあるといふとは確かに眞實です、何時の世、何國の人でも其心の裏に之を信じない者はありません。其を時とし



て「ナニそんな事が ある者か」と曰て、畏るべき上帝の審判を冷笑ふ様な流義のあるのは、自ら己れの罪深くて良智も本心も汚れ、曇り果てゝをる事を現はす者です。横着な雇人の爲には、主人の居ない方がよい、そこで主人の留守に散々遊んで悪いことをして「ナニ主人はまだなかく歸つて来る者か」と曰て自ら慰めてをる、けれども主人は何時歸つて来るか分らぬのです。そこで若も正直の雇人は、何時主人が歸つて来られても差支のない様に萬事奇麗にして善美に其行ひを守つて居る、其處に主人が歸つて此忠義な雇人の善行を見た時と前の不埒な雇人の悪い有様を見た時と果して如何でしやう。どんな不完全な主人でも之を見て其儘放ておくとは致しますまい。人間は誰でも自ら不完全を免れない者です、けれども人の善悪を見て其儘相當の報いをせずをる者ではありません。況て限りなき完全限りなき正義の上帝が其受造物たる人々の信仰と善行と不信仰と不敬虔の有様を見て知らぬ顔をしておいでになる道理はありません。

せん。若もそんなことがあつたら此世は眞の間です、全く悪い者の勝ち善い者の損となりますが、此世でも上帝の審判は往々行はれてゐます。よし人の裁判は間違つても上帝の裁判には微塵の間違ひありません。全知の上帝は人の心の底まで見透して、善を思ふた者には善の報い、悪を考へた者には悪の報いをなされます。されば其心が顯はれて言に行ひになした所の善悪には、固り糸條程も違ひぬ。嚴重な賞罰があります。前に雇人と主人の喩を以てお話し申しましたがハリ

ストス救世主は左の如く教へてゐられます。

「主ノ來ル時、彼ガ斯克(忠良ニ)行フヲ見バ、其僕ハ福ナリ。然レ凡若シ其悪キ僕、心ノ中ニ我ガ主ノ來ルハ遅カラント曰ヒテ、其同僚ヲ打テ酒徒ト偕ニ食飲セバ、乃チ俟タザルノ日、知ラザルノ時ニ其僕ノ主來リテ、彼ヲ斷テ彼ヲ偽善者ト同シキ分ニ處セン、彼處ニ哀哭ト切齒アラシム」(廿四の四)



十六、四十八、五十一)。

茲に主として萬民を審判する者は特にハリストス上帝の子です。尤も聖三者皆斯の審判に關係する者です(エウレパ十一の六、)けれども上帝父は特に審判の權を以て其子に任せられました(イオアン五)故に今救世主たる主イノス、ハリストスは後に全世界の畏るべき審判者としておいでになります。其時聖三者の前に信仰と善行の有た者即ち義人は輝く生命を得られます不信不悔の罪人は暗い地獄に苦しむばかりです。あゝ此世にも其靈魂に、來世にも其生命に、光明の輝きを得らるゝ道は、獨り『聖三者の教』があるばかりです。救世主のお言に左の如く仰せられてあります。

『時ニ義人等ハ其父ノ國ニ於テ日ノ如ク輝カン』(イオアン十一)。



258  
791



明治四十一年九月十日印刷  
全 年九月十七日發行

定價金五錢

東京神田區駿河臺東紅梅町六番地

發行所

正教會編輯所  
東京神田區三崎町三丁目一番地

印刷者

小西幸吉

印刷所

全上 日本印刷株式會社  
電話本局一千八百六十九番

東京神田區駿河臺東紅梅町六番地

發行所 正教會事務所

電話本局二千五百六十九番



1



7  
2



聖三者の教

正教本會編輯所

国立国会図書館

020908-000-1

特47-892

聖三者の教, 即ちハリストス教の事

水島 行揚/著

M41

ABI-0746



特  
8



